

百舌鳥・古市古墳群

WHA 賛助会員、認定講師、世界遺産検定マイスター
小林 真知子

昨年 2019 年 7 月、日本で 23 件目となる世界遺産として登録された、『百舌鳥・古市古墳群』。百舌鳥エリア(堺市)の 21 件 23 基と、古市エリア(羽曳野市・藤井寺市)の 24 件 26 基の、合わせて 45 件 49 基の古墳で構成されています。その中でも最も大きい、仁徳天皇陵古墳(大仙古墳)とその周辺の、世界遺産登録後の様子や、訪れてみて自分自身が感じたこと、思うことについてお話ししたいと思います。



拝所



宮内庁札

日本最大の前方後円墳でもある仁徳天皇陵古墳は、本体の墳丘部分の長さは 486m。3 重の壕を含めた長さは 840m に及び、その長さは仁徳天皇陵古墳の最寄駅である、JR 阪和線の「百舌鳥」駅から 1 駅先の「三国ヶ丘(みくにがおか)」駅の、駅間ひとつ分とほぼ同じ。大きさは東京ドーム約 10 個分にもなります。10 年以上前から、古墳の周囲を歩くことができる、約 2.7km の周遊路も整備されており、歩いてみるとその大きさを実感することができます。

一方で、以前から度々要望のある、「古墳全体を上から見る」ことに対しては色々難しい点もあるようで、現在は航空会社などが運営する、大阪・八尾空港からの遊覧飛行は実施されていますが、堺市としては、近隣住民の方からの声もあり、現在はヘリコプターなどを使った定期的な遊覧は行われていません。比較的高い位置から見渡せる場所として、近くでは堺市役所の 21 階展望ロビーや、「三国ヶ丘」駅屋上の古墳ビュー・スポットがあり、こちらからは小高い丘程度には見えるのですが、古墳全体を見渡すことは難しいです。そこで、堺市の解決策としては、今年の夏頃を目標に、気球遊覧の実証実験の準備が進められており、その実現が待ち望まれています。

今のところ、ボランティアガイドや先述した周遊路の活用に加え、仁徳天皇陵古墳のすぐ近くにある堺市博物館内での VR 体験、百舌鳥古墳群シアターなどがあり、その歴史を気軽に学ぶことができます。無料で観覧できる百舌鳥古墳群シアターでは、創建当時の姿や様子をわかりやすく再現した映像が解説とともに流れます。こちらに寄ってから見学に向かうと、当時の様子を想像しながら、より深く理解できると思います。ここに気球遊覧が実現すると、さらに楽しみながら学ぶことができるでしょう。



博物館正面

世界遺産登録後は観光客も増えました。ボランティアガイドの方のお話では、こちらから声をかける前に、観光客から積極的に説明を求めに来られるようになったり、旅のついでではなく、ここを目的として来てもらえるようになったりと、以前より興味を持ってくれる人が増えていると実感されているそうです。私が訪れた平日の午前中でもそのような訪問者が多く、熱心な外国人観光客の見学姿も見られました。

これからの課題としては、広い古墳群をより理解しやすくする環境づくり、また、登録直後は賑わいますが、他の世界遺産を例に取っても、観光客は徐々に減っていくのではないかと厳しい現実を予想せざるを得ません。その対策として何ができるのか……。堺市は気球遊覧の実現に向けての準備に加え、周辺地域の観光拠点となるような施設の整備に乗り出しています。ボランティアガイドの方々も、同じように世界遺産を受け持つ他の自治体を訪れて、持続可能な観光対策を自主的に勉強されています。少しでも良さや価値を知ってもらい、自分たちの想いを伝えたいと、約3,000個の古墳ストラップを作って、観光客に配られているそうです。遺産それぞれに課題があって、解決策を練ることや努力はもちろん必要です。ですがそれ以前に、ボランティアガイドの方々をはじめ関係者の方々の、地元の遺産を大切に想う気持ちが素晴らしいと感じました。



博物館の入口看板



シアター看板



ストラップ



仁徳陵・陪塚の復原模型

話は少し逸れますが、私は前々から“マイナー世界遺産”という言葉があまり好きではありません。“メジャーな世界遺産”である、「モン・サン・ミッシェル」や「万里の長城」のように、世界的に有名なものでもなく、その土地の人々にとっては特別なものです。身近にある文化財や自然を大切にするからこそ、そして、それらを受け継ぎ、将来世代に伝えていくことは、世界遺産活動の理念そのものです。そういった気持ちも汲み取りながら、これからも世界遺産の勉強をしたいと思っています。